

して徒らに賣込みに腐心するが如し、斷じて顧客な百年の後に失はざる所以にあらず。

八

倫敦にゐる時分に日本の雑誌を見て牧野英一博士の『最後の一人の生存權』と言ふ論文を讀んだ事がある。家庭學校の富岡農場に始めに米が出來た事を紀念するための講演會に出席せられた牧野博士の社會問題に對する短篇であつたその論文を非常に面白く讀むと共に朔北北言の國にも米が取れる様になつた……と言つた様な文句を未だに私は覚えてゐるのであるが北海道の拓殖のために眞劍なる努力を續けて來られた幾多の人々に對しては私は萬腔の敬意を拂

ふ。特に北海道に米を産するに至る迄の農民の苦心談の如きに至つては私は極度の感激を以て傾聴する。昔から北海道の利權が黨利黨略上の好餌に供せらるゝ事なく、且つ學生の努力を以て北海道の開拓に従ふ官民のみがそこにあつたならば、北海道はもつとく立派に開拓せられたであらう。今日北海道の各地に於て徒らに官權に頼らんとする請願や陳情の夥しいのも、私をして失望せしめたものゝ一つである。往年未開の原野に草莽を切り拓いたバイオネアアの意氣を彼等に求める事は、そもく無理な往文なのであらうか。

願はくは北海道拓殖の前途に幸ひあれ。

利根川下り水郷遍路

□×新聞記者 長

紅 生

……ブラック生活の暑苦によい加減にうだつて了つて、些

可神經も狂ひさうになつて、こんなことが持續したらあ

たら一生を棒に振るも同様、こゝろでゲーラチエンジを一つやらかして方向轉換策として熱い頭を水で洗つてやれ、我乍ら妙案天晴れ名策とばたと手を打つて考え出したプランが利根川改修工事視察といふのである。中産階級にふさはしい様な千葉縣安食町を起點として利根川を下りて銚子漁港視察で終りを告げ様といふのである。尤も行き過ぎると太平洋の真中だ、怒濤の中に藻屑となる。許りなんだから其麼危険は冒し難い、斯く簡單にプランを樹てた許りで熱頭も忽ち冷却する氣持、いやはや現金な頭だわい。

△廿四日(土日)同行七人、上野を午前八時二十二分の成田線にて出發、何時でも遅れるといふ變體癖を有して居る東京日日のN君を心配し乍ら何時までもプラットホームに未練を残す水郷遍路と聞いたけ中央の松崎君民老の如きは『よし、そんな涼しい思ひをするならば、俺は十日間位改修工事の視察記を書くよ。』

と豪語をする、私と同様バラック生活に惱まされてゐる連

中のこととて喜ぶまいことか、こんな連中に改修工事を視察して貰はなかつちや有難味がない、さうかと思ふと『今晚の兩國の川開きの賑はしさもまたよいへ』と惜しがりやいふ玉君が居る

『花火を見るのではなく美人の頭の勘定をしに行くのだらう』

と不心得者を茶化す君も居る、這慶、阿呆問答が綿々として盡きない、其内に御腹が空いたといふて悲鳴を擧げる人もある、ザット二時間も経過すると流石に鈍い汽車も。吾々一行を水郷遍路の起點である安食町に降して呉れる、利根川改良事務所から小川技手君が案内役として迎へに來て呉れた安食町に着けばすぐ利根川が傍に流れて居るものと早合點をして居る連中のこととて

『おい、利根川は何處だい』

『改良事務所は何處に見えるのだ』

と連發の質問に小川君、道路の真中に突立つて頻りに昔の地圖を擴げて叮嚀なる説明を反覆して呉れる。昔は銚子街

道に當つて居るとかで町はだらだらとして續いて居る、行けども行けども一向川が姿を現はさない、然し町並にある家屋は古くはあれども非常に裕福な建方である人口四千七百八人あつて減じる一方と聞く、夫は舊利根川を廢川にした關係上物資の供給がなくなつたのに關の外には別に生産事業のないのと、停車場が町外れにあるので恩恵に浴さない關係とであるさうな、政友會の吉植庄一郎氏の地盤であるさうな、漸く町を出る頃になると道路は石礫がゴロゴロして居る、團體の大きい天民老

「おい、未だ歩くのかい、俺は暑い、たまらん」

と悲鳴を擧げる、すると案内役の小川君

「もう少しです、あそこに見えるのが水門ですから」

黙々子共喧しい、だまれ居れと言ひたくなる、現在吾々が歩行して居る石ゴロ道が小川君の説明によると、舊利根川の堤防であるさうな、成程、堤防らしい、低い、四十三年の大洪水のとき崩壞して一面泥田となり、所々に溜つてゐる水溜はその時の遺物であるさうな、其の時の被害が田畑

四千三百三十町歩、損害金百四十余萬圓、印幡沼附近ではザツと三百余萬圓と聞く、そろそろ河川改修工事の序幕が始まりだ、効能が顯著だ、誰が御賽錢をあけう、依然、小川君醇々平として説述すること詳細を極める、五尺余りしかない舊堤防から左側へ見える新堤防の高さと比較して事務所のトタン張りの情けさをつくづく感じて水門へ行く土堤を歩かされる、印幡水門の上に立つて四方を睥睨すると左顧すれば通行して居るとつまらない安食町が背後から見れば、舊利根の流れに沿ふて何と綺麗な水郷の町であらうか、緩かに流れて居る水面に深緑が撮つて、これに完全なる照明装置があつたらば公園博士の田村剛氏などは必ずや「噫。天下に比を見ない安食の水の上公園……」

てなことを言つて讚美を久しくするであらう、富豪は先を争つて別荘を作るであらう、一段歩僅かに二百八十圓也と聞いては貧乏人の私さへ三百坪位は購入する氣になるものを。また右顧すれば大河滔々として川幅一杯に水が流れて居る、關東平野を壓して居る阪東なが名に背かず偉大な

る利根川よ、と許り最大の感嘆詞を投げて、まづ御手近の印幡水門の説明を聞く、特殊なものとして横利根閘門、小野川水門とを合して三大水門とされて居るさうな、此の印幡

水門は工費廿八萬四千圓、延人員六千五百人を費して大正十一年三月に竣工したる合掌式復扇であるさうな、竣工したる年の八月とかに洪水があつて、河と利根川とが十五尺とかの水差があつて、完全に此の水門にて遮斷し被害なからしめたので土地の人達は神様の様に有難つて居るといふ話である、だが、私共は此の位のスバルは常に見掛けて居るので、別に有難味を感じない、恰も山奥へ住んで居る藥の味を知らない人達に喜樂を吞ませて有難味を感じさせるのとは少しは違ふ、一行は餘り感心した顔をしないので水門下に浮んでをる、小蒸汽船に吾々を案内して呉れる、小川君が

『此の邊は溜湯のため水深が浅いので此の小さいモーターで十五分程川下に行つて貰ひたい、大きな船が用意してある』

と聞かされて些か窮屈な思ひも解けて、今更乍ら船内に飾つてある切花のダリーヤを眺める。

『用意がよいか』

と小川君の一聲に吾々を乗せた船は纜を切る、すると忙しげに小川君は青地圖と工事記録帳とを擴げて第一期から第三期まで利根川改修工事の概略を説明して呉れる、吾々はおやおや説明の中毒へ罹らなければよいがと心配をしてゐても小川君は商賣だから無感心だ、

一 銚子佐原間、十里一期工事（卅三年度着工、四十二年度竣）

一 佐原取手間十三里二期工事（四十一年着工、現在九割三分竣）

一 取手芝根廿八里三期工事（四十三年着工、現在九割七分竣）

利根の支流中川、江戸川も含有して居る、その工費六千三百萬圓也、その工事の出来ない前には、三十三年度より大正三年まで八回の洪水の損害金一回當り平均額千四百七十

萬圓、大正三年度から大正十三年度までの被害平均は三百七十萬圓であるとまた有難味を並べて呉れる。そして第二期工事である、佐原取手間の重なる重要工事、築堤三百萬坪、機械浚渫二百六十萬坪、人力クツサク二百八十萬坪、附帯工事五十八ヶ所。護岸左右延長約三里、水利延長約四里大正十三年度延人員七百萬人、大正二年の一番多いとき七十二萬人屈曲五ヶ所を新川堀へ直川にした佐布川町にて七十間といふ高い丘を四十間も掘り下けて水差の平均をした、然して麓ヶ浦、北浦間に挟つて居る耕地千二百五十町歩の被害をして永久に洪水から逃れしめる、但し私が見て工費を聞かなかつた、これは千慮の一失である、河水が久しく續いた晴天の爲め溜れして居ると言はれるが川幅八十五間一杯漫々として流れ、悠久の感を興へる、小船が進行して左側に茨城縣下の源清田村を見るなり銚子の川口まで十八里ありと言ふに、約三十町の間堤防と堤防との距離が六百五十間と聞いては、流石に吃驚させられる而も二段構への新堤防の高さ水面から廿五尺と聞いては如何

なる洪水が氾濫しても永久に附近の地は侵されないのであらう、小船は緩から速力で進行してゐる。兩岸は見渡す限り蘆が生えて居る、曇り勝ちなる空にも點々として、碧空を現しその雲間の途切れた所から、熱い太陽の日影を射して来る。

『俺達の夏の旅行には必ず曇勝ちで暑さを除ける、今日も見給へ眺向きだよ』

と君が自慢したことも何もならん、太陽の方では遠慮がない。

『君達の言ふことは當にならん、暑くなつて来たよ』

と天民老、暑い暑いを連呼する、そして寫眞の種板の破損したのも知らないで、頻りに珍らしがつて、カメラの中に風景を入れる、案内役の小川君が廿歳の雇から四十二歳の今日廿二年間改修工事へ浮身をやつしたことの勤務振りを聞いて、

『利根川の主よ』

と感嘆もしたり、物珍らしいので、四方へ眼が動く然し何

時までたつても船一つ来ない。十角入樋小水門の所で二十噸張りの梅號に移船する、今までの窮屈な思ひから開放されてやつと船に乗つた様な氣がする、此の十角入樋の小水門は十里と角崎との二つを合併したから起由來する、そして此の小水門は昨年十月着手して工作物四萬圓水路合して約八萬圓の工事費である、附近四百町歩の悪水排除に効がある、更に新しい氣分で水路を續ける、そして兩岸の單調さが少しづつ眼に這入つて來る、五十二里の改修距離に橋らしいものは最近架設した栗橋一つ、取手の鐵橋一と現二つあるだけ、交通頻發して來たらば一體橋梁は如何するのだらう、といふ疑問起る、小川君に聞いて見ると

『夫り實際其の通りです、發在佐原町の對岸との交通問題としても橋梁を架設せねばならぬとの議が多少論じられて居ます、橋一つ架設したらば、どんな少額でも三百余萬圓は費るでせうね、其の代り交通機關として半里位るの距離に渡船があります』

帆船が溯流するには橋梁のない方がよいが、將來は必ず橋

梁架設費の負擔問題が惹起されるであらう、適々三十五反の帆かけ船が來ると一行は拍手喝采をする、大供連の無邪氣さ加減、神崎町のナンヂャモンヂャを見る、内務省地理課の史跡名勝保存の指定植物である、縣社神崎神社境内地にある、樹齡千二百年といふ、先年燒木して新樹である、舊曆の十五日に相當して居るのでナンヂャモンヂャの樹皮を削つて香茶の代りに香ませる。ビール腹にこんな神嚴らしい香茶を香ませてせめて御腹だけでも淨化さして淨佛が出来る様にしてやらんと罪劫の深い連中は必ず地獄へ陥つること請合、然し淨化されない私は急阪で轉々ところけて折角の白い洋服をどらけにして、船に居残つた天民老に嘲笑さる、ナンヂャモンヂャ所か私の氣分は滅茶苦茶だ百二十度の昂奮状態である。

そろそろと銚子よりの上りの貨物船が通行する、それだけに佐原町が近くなつたことを思はせる。小さいかもめが餌探しをやつて居る、船員に聞くと銚子河口が荒れて居るときはこんな上流までも來るのであるさうな、かもめでな

くかもごめといふのださうだ、名稱の退化か進化か何れか

知らないが、確かに小さい様に思

はれる、間もなく横斬根の大開門

へ到着する。天氣益々清明、風風

ぎて波静かさ、何れか一句捻り出

したい様な俳諧氣分にもさる歌詠

めぬ、男は悲しさうだ、佐原町方

面から橘號が來て鈴木君が案内役

として小川君と交替して來ること

を小川君より御紹介に接し、御好

意感謝の意を表すそこで、小川君

より開門の説明を聞く工費七十一

萬六千圓、延人員一十二萬千四人、

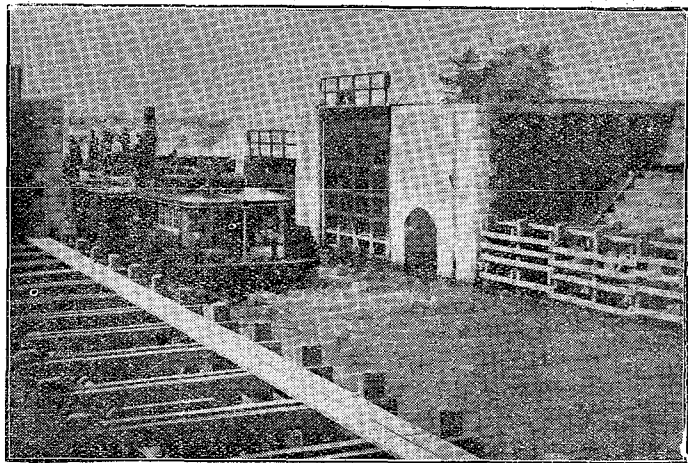
着工大正三年八月、竣工十年三月、

スパン三十二尺、長さ三百尺、一

日に船の出入三百艘、日出から日

没まで六人の機械手が氣分毎にやり詰め、扉は合掌式であ

る、扉の開閉を見實地にやつて呉れる、都合よく霞ヶ浦
飛行場のボートが實地檢分代りを動
めて呉れる、閉鎖して約三分間の時
間に水差が外部の水差と平均さる、
ギートと扉が開くと船が外部へ出る、
大きい扉が廿四噸、小扉が十三噸、
大正十一年度の洪水のとき外部との
水差九尺五寸あつて、まさに試験濟
みであるとのこと、文化式小住宅が
開門の上に建てられてあつて、別天
地の觀がある、西岸には葭と蘆とが
順序よく茂つて、水がノタリノタリ
と岸にブツカル毎に吃驚した様に葭
の中に居る行々子がチチチと啼く、
月見草が頻りに咲いて居る、向岸を
見れば香取の神巖なる境内の森が見
える、遙かに筑町の山が青く見える別莊へ行きたいものは、



門 關 沖 原 佐 (郷水と根利)

る、扉の開閉を見實地にやつて呉れる、都合よく霞ヶ浦
飛行場のボートが實地檢分代りを動
めて呉れる、閉鎖して約三分間の時
間に水差が外部の水差と平均さる、
ギートと扉が開くと船が外部へ出る、
大きい扉が廿四噸、小扉が十三噸、
大正十一年度の洪水のとき外部との
水差九尺五寸あつて、まさに試験濟
みであるとのこと、文化式小住宅が
開門の上に建てられてあつて、別天
地の觀がある、西岸には葭と蘆とが
順序よく茂つて、水がノタリノタリ
と岸にブツカル毎に吃驚した様に葭
の中に居る行々子がチチチと啼く、
月見草が頻りに咲いて居る、向岸を
見れば香取の神巖なる境内の森が見

此の關門の上に半日程立場をしてゐたまへ、何もかも浮世

の俗念を掃除が出来、夫から對岸の佐原町に着くと、吾

々の宿泊するする木内旅館マーク入れの旗が見える、日本
で始めての跳開橋なる小野川水門を見せて呉れる、着工大

正八年十一月竣工十二年三月工費十三萬七千圓。スパン二

十尺、爰に竣工してから橋を跳開する様な大きな帆船が逢

行しないので、實地をやつて呉れるといふが機械が錆びて

居て中々上へあがらない、四人がやつさ、もつさで、やつ

て六十度の角度まであけて見せて呉れる復興局の橋梁課で

は驛に始めの跳橋を架設するさうだが元祖は私の方丈に小

川君が改めて威張る、其處で明廿五日午前九時出發を約し

て吾々一行は香取神社に参拜して諸々の穢を落す、先代の

香取宮司は佐原町の藝妓狂ひで鹹首になつて現今の宮澤宮

司に變る、その宮澤宮司も中々の酔興人と聞く、吾々から

見れば頼母しい氣がする、神饌料を拂つて護國鎮守の御護

符を頂戴する、吾々は香取と言へば直ちに講談で神刀流の

達人塚原卜傳、諸岡一羽を偲び、これが元祖の飯塚長威齊

家直の女妙なる劍法に思ひを寄せる。

神木に春の杏取や杉若葉 芭蕉

の大神木を見て鬱蒼なる千年の緑に西行法師ならでは神
前に銅貨を三ツ程投げて叩頭を二三遍する、宮司が案内役

となつて境内地を見せて呉れる、供進金が尠ないと滾して

居た、紙上を以つて松本神社局長へ御傳へをする、來年五

月澄宮殿下が學習院生徒の御資格で御参拜になるさう、な

いつも賢し。

香雲閣から與田浦の眺望を遅くして靜かな生活を羨望し

て

『こんな所で一週間程原稿を書きたいなあ』

記者根性をさらけ出す者が居る。

宮司さんから種々と改修工事は難傳をまた聞かされ、う

んざりする、境内地を拜禮して朽損した大鳥居の貧弱さを

問ふと、宮司は

『二本ほど杉がありますので作り直します』

と決して鐵骨コンクリートの鳥居を作るとは言はない、

佐山縣知事を以て如何となす、

午後五時頃旅館に到着、一風呂浴びて旅館マーク入れの涎衣がけになつて旅行氣分に浸る、ほんとに夏は水郷遍路の有難さを知る、宿帳を見れば東京日々の利根川行の一行の名が見える、正水博士を筆頭に學者の名前がざらりと聯ねてある、あの記事を読んで吾に益する所少しもなく、昔の明文は、吾々の腹には何のこたへもなし、階段を上下すること未だに船に乗つてゐる様な幻覺を感じる。

廿五日は鹿島詣のため一行申合して觸穢を禁じる、外の新聞記者連に見せてやりたい、此の淨化生活をね、宿屋の前の町役場に修養講話として内務省社會局の平林とかいふ餘り聞かない人の講話がある。そんな堅苦しい講話よりも吾々の實地講話が遙かに社會的であり青年の生きた指導者である。筈であると佐原町署の石原署長と共に氣焔を擧げる。石原署長年齢は吾々一行の天崎老と同年の四十八歳である、洒達な人柄らしい、佐原町は今井健次郎（政友會）と鶴澤宇八との地盤であるさうな、政黨的關係の面倒

な土地を兼ねる署長こそは渦中にあつて御氣の毒千萬早く警視にしてやつて下さい、夜が更けると共に名物の蚊が襲來して酒も呑んで居れない、夜は至つて涼しい、未だ残つて居る水路の旅の無事を祈つて午前零時就眠、一行のイビキ雷の如し。

廿五日は旅館の裏手にある御寺の鐘の音眼に眼を覺す午前九時豫定通り出發、今日こそは吾々は開門通過の實地試験をするので

「夫りア開門が見える」

と一同喜ぶまいことか、所が豫期に反して開門は開放してある。不思議に思つて聞きたゞすに、鈴木君

「恰度、満潮時ですから水差がないので開門してある」

この事に落膽して了つた、開門を通過するとき噂にきくバナマ運河を想起して髣髴たるものであると確信した、船は上ゲ汐に潮江して徐々に波を切つて進む、横利根の川幅は二十間、葭と蘆とが交錯して茂つて居る、行々頻りに啼く南瓜の花今は盛りである農家散點してポブラが矗立し

て面白い木影を水にうつして居る、時々木の上に涼み臺を作つて其處に集つて居る子供達がワット喊聲を擧げる、兩岸は益々迫つて水深を保ち水郷の趣を濃厚にして呉れる、昨日の單調に内心は飽きて居た一行は今日の水路には愉快を叫ぶ、河魚捕りの小テンマ散在して居る、それが吾々の船の波を喰つて轉覆しさうになつて吃驚する、牛堀を過ぎる頃になると潮來町の噂で持ち切る、恰も吾々の同業者廿四日夕刻から潮來町へ來て居る筈である、噂に聞く潮來十二橋を案内圖に見て非常に綺麗だなアと思つて、船の進行を遅いなアと嘆息する、そろそろ潮來町が眼界に擴大して來ると船の上層部にのほつて、左に潮來町の中央にある金色然なハイカラのある建物を見て、眞菰踊りのダンス場と聞いてその淫蕩氣分を推察し、右に十二橋なるもの眺める何と貧弱なる十二橋であるか、これでは吾々の家の前にあるドブ川に架けてある木橋である橋の長サ約一間昔から名所によい所なしの俗言は適中して居ることを今更乍ら考いた。吾々は餘りに幻影を追ひ過ぎる潮來町を左側に見て

北浦に通じてゐる前川へ船を入れる、何十年振りとかで此の大きな船が狭い川を通過するといふので沿岸の農家よりも川自身が驚て居る、船は極めて徐航し北浦に入り午前十時半大船津に到着、直ちに鹿島神宮に參拜する境内地は香取よりも一層神嚴である、ほんとに神寂の地である、神主共のイガツクのは氣ザハであるこれで私共の宿望も遂げた譯である、ほんとに重荷を下ろした様な氣分になつて、歸路の噪しぐことは現金な人達である、午後零時半大船津を出發、最後のプランたる銚子まで二時につきたいといふので最速力を出して貰ふ、鰐川の急流を下り外浪逆浦に出る今日の御天氣も曇り勝ちで、形容詞通りの金波銀波なんてことは見られないが、船よぎる跡遠くまで波紋描き、北西遙かに常野の翠黛煙り水天髣髴の感がある、適に魚飛ぶ、對岸一分目新田の所は舊利根と聞く、約一里餘新門を屈鑿して流れの逆江するのを防止したと、外浪逆浦を過ぎて息栖神社邊に來ると船は益々速く十六島が青々と葭と蘆の中に埋まつて居る様な氣がする夫より常陸川に先る、此の邊

は亂流であつたのを整つた一本の川にしたのであるさうな約二里餘、常陸川を過ぎて又もや利根本流に入る、大小の船の往來激しい、大抵モーター付きである、必ず銚子丸何號とかいてある、愈々かちめが飛び廻つて居る、竟に午後三時銚子の汽船の發着所へ到着、見たいと思つた銚子の漁港計畫は依然として地圖の上だけの計畫である、思へば十年の後ぢやなければ築港が見られない、農林省といふ所は何とのろい補助金の下附をするのであるかつて、横濱出張所の安藝博士は管下の横濱港修築の經驗から割出して、『私に銚子の漁港をさせたならば一ヶ年にして見せる』と豪語されたことがある、ほんとにさうかも知れない、

そのことを地元の小野田縣議に話をしたらば、頻りに肯定して居た傍に居た町長も、思つて見れば、約廿里の水路を二日掛りで見聞した、百聞一見に如かずと言ふが六千數百萬圓の工程を熟々見るに金の有難さ、と人力の持續力強のさを偲ばせる、十六島が安閑にして居らるゝのも、また印播沼の附近の住民が水の恐ろしさから逃れることも、皆こ

の二つの御影である、殊に工事の初期時代は悉く人力であつたに、その根氣のよさ、日本人でなくては出来ない藝當である、機械力の萬能の今日その幼稚を笑ふ乍かれ、毎年河川氾濫の防止策として費途する、金は莫大である河川の無い國は災である、然し工程なつた後を見れば其時の苦痛は忘却して國土の幸福を思はずに居れない、濱口内相に乞ふ緊縮方針に累されて河川の改修を怠つて下さるな、これは見聞したる吾々一行よりの切望である。利根川よ永久に沿岸の民に或は耕地に被害を與へずして悠久として銚子河川より太平洋に流れて呉れ。

